



悦訖七部集

巻みの

三

~ 5
5625
3



5625
3



晉其角序

那潜乃集つくる事古今
わたりて道れおきて起
き時たれや幻術の事一
しとるれ白り魂を入
えゆえよ極めこころに似
海一久しと世よとちり
まくんようちてる愛れ

上

一



昭和十六年一月十一日
尼野貴英氏贈

を志し五徳のつとめ及こ
ゆるをこころに思ふも
こたはり彼あり上人の骨
てんを作つて神の魂
もも留を吹やうになん
ともし神を人よ成て結
及魂の法れをうろくは
結小

臣も志したる一為れ入る
しアイウエフとくひも
いふ好ん吟誦をわめ
一と神の魂れ入る
よこころとて我翁行脚乃
伊賀越し山の中
後より小義を看せし
乃神を入るを今

ちまら断腸たむをいを呼
しを神あつに懼る人ま幻
術たりし我をえりし此
集をつくもしと様そのい名
付しは建ちる是と序をそ
れらりしり魂を合せし去来
元兆のほ一やうたのよまうせ
書

猿蓑集卷之二

冬

初し我猿を小蓑をほし也 芭蕉
あまのけをほる真の夜は神の
時をたまひしは 其角
幾人し我のぬぐ物に格 千那
越持の杉振ふるし 僧 丈州
史邦 正秀

Front

舟人のあつちきこゑの可なりし 尚白

伊賀の境より

たろくや奈良の隣乃一時面 曾良

時をもちや早木ついで窓あり 凡北

つらつ竹田の里や坊しく代 乙羽

ぬすまされ一早の光や小夜時毎 羽紅

新田の釋殻燈のしる事 昌房

いづれや沖の河ぬれ其帆片帆 去来

とらねよ坊や北平此早のあ 百歳

つらつ動く地をこねたれ 野水

後より

しつらつに坊や村のう船の中 其角

歸つたうたふる志ん送切し 同

禪もれ雲のうらなや那寺月 凡北

百舌のあつちきこゑの可なりし 嵐蘭

おつちや頬腫痛む人の影 芭蕉

あふけを延きけらるの冬をまを 凡兆

たのしみ

揮麻のこまあり外も枯ゆきれ 伊賀 土芳

流禊をたもめて過る十夜外 膳所 裾道

ちやのこねやいづれもあはれ女 伊賀 越人

まのむけ茶のまゆよねきりり 猿錐

古ちれ貴子のもちりーをりるゑ 凡兆

公羽の堅田よ軍始をゆき

雑炊のあまらうけりハ冬ともり 其角

こへんまき牡丹のよねんまの裸 伊賀 東来

草津

あまのさるらうらうらのこころれ 尚白

神速水のよもらうらうらね 珠碩

霜月朝旦

落すらりあふ物あり 赤拍 伊賀 良岳

水を月けあを稽よ水他よ 羽後田 不玉

今ハ世をさるるのしほ

尾張 貝葉

尾野のこころのいふ

去来

一、夜くさむき

伊賀 探丸

こころのいふ

尚白

茶湯のこころ

江戸 龜翁

炭竈のこころ

九兆

住つぬ旅のこころ

芭蕉

寝ころぶや

其角

山前小

九兆

木兔や

尾張 菘塙

こころの

伊賀 半猿

貧交

まじりて

丈艸

浦風や

曾良

あゝ儀や

去来

糧のあ

史邦

古今

脊門は乃入のよのほるふちをれ 丈艸

いし道々雪よまらきて鳴千鳥 千那

矢田の柳や浦のあつれは鳴き音 元兆

筏とれたんくさ跡や鴛鴦の舟 本節

水底をさへて見し魚の小鴨舟 丈艸

るんも夕霞をくわさる余吾の湖 路通

死まへて探成らん鷹はくか 豊稔

襟まきり首引入る冬月 杉風

天本戸や鎖のされて冬月 其角

かろちりれ蒲團をさりや冬月 暮年

見やるとん旅人ふり石部山 智月

公卿の御れあはれを衣とあは
らる記あり略く

首出してさるる冬月 竹戸

題竹戸之衣 義濃

五とめハ我のまけあはれ紙衣 曾良

魚のつけ橋乃やるせやと秋外 探丸

志のこゝに教珠の事す彌袋 史邦

清白砂を候す

膝つとよむしこもり居る霞のれ 史邦

椋櫛の爲に霞は狂ふありけ 野童

鶺鴒乃鴉ふりこほす雨散るれ 不蜂

呼ふと射賣つんぬあられけ 凡兆

こころの渾ふりも朝飯の出まの 畫好

こころちや内へ居られ人へ傳 其角

初音よ響部屋のうく朝顔 史邦

ちかやけのも紙吹くちや音も 羽紅

わらも子ら瓜を転のこ響まらけ 探丸

下京ちやうつむとほく夜れる 凡兆

ちやくと川一筋ちやちやの原 同

信濃路をさるる

ちやちやも横屋に居るの如し 芭蕉

草庵の留り候す

妻老の公属もあひと巻れり 其角

若れ目ハ竹の子筈うはさりり 尾張 羽立

海もくも健あつハさるれり 長崎 卯七

いりりてりや言吹のり 去来

青亜追悼

乳のそ子に世を海も歸去 尚白

うゝ魁も元也の慶も色れ也 芭蕉

餅の記憶ハ新ハ似ぬとも 乙羽

一月ハあゝあゝ 文州

住吉奉納

夜邦系ヤ鼻息白一両の内 其角

節季催よ又のむじ 伊賀 須球

あゝやゝら 同 祐甫

乙羽、新々電

くゝ家をとく 芭蕉

弱法師 其角

歳の後や曾祖文を分けふと枕 長和

くす盤れつるにあらはるの君 去来

ふきては事始まらば伊勢の 同

大とやちのたきかきくくく 羽紅

やうとれく又せむしん年暮の層 其角

い孫のく人より進つ年暮暮 路通

条のく我破進袴は幾くくく 杉風

猿蓑集巻之二

夏

有明の面みくすやけくくく 其角

夏ふくくくくくくくく 木高

おもくくくくくくくく 芭蕉

時きくくくくくくくく 尚白

けくくくくくくくくく 凡兆

くくくくくくくくくく 智月

蜀魂たぐやあの方法角樽 史邦

入おれりまふ中もにほくまは 羽紅

ほくまは代官者やほくまは 文州

こいねを我唄てあけあつて 去来

松鴉一見の胸中をうめくや 遊女 奥刃

去鴉や 鶴よ身をまわれほくまは 曾良

ふもいふまをさしけりあつてあつて 芭蕉

旅館庭でさうく 経年をとるす

あつてあつてあつてあつてあつて 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

あつてあつてあつてあつてあつて 其角

あつてあつてあつてあつてあつて 江戸 全峯

別僧

あつてあつてあつてあつてあつて 越人

あつてあつてあつてあつてあつて 珠碩

翁は依られてすまふ

似合しはけり三人のこゝもはなれり 杜園

まことさきも句もけり嵐のま 嵐園

井はすきよはく清杜のま 出・残

起せく地乃の回乃

起くのみくさしはなす仙のま 仙化

題去来之話 峨洛柿舎

吾極る地九の本舎九を名はす 九龍

破垣やう曾の麻子夏がし道 曾夏

南都旅店

誰のこゝに千は教乃園那は桐 千那

洗濯やもあ尾よとと張は柿のま 薄定

豊國よて

竹の子れ力を九は龍くさる九は入九も 九龍

ふけは子や去白濁来りし去を来る去 去来

たけのこや芭稚蕉ま芭の蕉は芭も蕉し芭 芭蕉

猪ノ吹入さきくさきく丸 正秀

明石夜泊

晴まやいふれも夢城交月 芭蕉
君の状も筑摩奈を鍋一ツ 越人

五月三日

しほりーさるあそ

石の音とまきくしげの高浦や 其角

粽はふかきもふくさむ額髪 芭蕉

隈藻の廣きさきく餅粽 岩翁

さきく客人やまきりけ 尚白

五月六日大坂より死の
遠忌を吊しり

大坂やいぬぬれ夏乃み十夜 蝉吟

真茹言館

夏草や兵九うけ先乃跡 芭蕉

這出よわい屋下此蟻の跡 同

け境いひひりるあしひ

かきつり角かりまけは流すの石 同

五月あゝ家あり控てあゝ

元兆

は縁妻は味なもやわり

木節

るとの謂はれありさつと雨

史邦

奥羽を右取の郡よやく申遊まの
の縁はいつくくやと存ゆらうし

道より一里すくらりたり乃方

笠落しつらあまよまことそらゆ

わつしきしる五りしぬいそら

わうくハハハハハハハハ

笠落やいつそみおれぬつり道

芭蕉

大和紀傳のさくいそらあ一節
てけ東の形れをいそらてまね

すめらむのハ粒は一くしる
紙のくしるに書つり伝

つらりもくそら坂やみり

去来

髪剃や一夜今情みり

元兆

目の道や羨れくさ月あゝ

芭蕉

控地や若もせくそらり

羽紅

七十余の老醫みまうりや
やまをころりてなくまう
にいそらの白をけるるれを醫
いそらりつらあまよまことそらゆ
る人よあゝさわくらまは衣よの
わらひいそらりてあまよ

けしん年よころしとくそめく
ゆのさうりりきし

六尺七カヤ〜や五月あえ 其角

百種も妻よ取つ〜茶摘可 去来

志〜そや茶山〜よけまぬつれ 正秀

つみ合ふんれけや妻白鳥 游力

孫と愛〜

妻業れ家〜やらん雨蛙 智月

妻出果て饗道喰〜しやぬか 花紅

草〜川の間〜

月流の〜りや奥け田挿〜 芭蕉

雲〜の〜と春〜

眉掃を面影〜し〜ね粉のふ 同

法隆寺南帳
南無佛の名字を拜す

法袴ゆ〜し〜な〜り〜ね粉のふ 千那

田の畝れ〜つ〜む〜り〜量〜れ 伊賀 万手

膳所曲水之樓〜

螢火や吹とくはまきそし場のかき 去来

壱田乃螢火二句

闇の夜や子を泣かせと螢火の 九兆
うらもつん花船歌 酔てあつたれ 芭蕉

之熱野へ流るる時

螢火やこゝろうろくまハ鬼尾谷 田上尼

あれはらゝ粉とて口をあふぬも 尚白

草むしや百合の中こゝろの虫 半残

病後

おつらやわらふつゝく百合のふ 何処 大坂

すし舟や家より出たよ百合の花 乙羽

蟻蚊群を作つて

子やなさん其子の母を蚊の喰はし 山嵐

饑割

とさともや蚊屋のうらぬ旅の宿 里東 膳所

うらぬ人よつね
糸雲するは春よこれむけ

予一々之使と昔の冠者よ名は其

降のや空の空くは耳乃乃穴 文州

下等や比出たうは蟬の形 嵐雪

客よりや指をかける船の形 探志

形く死ぬさうまうんをす船の形 芭蕉

表さや盲麻州さあめのは 槐市

渡り急ぐ藤の花のうは流哉 元北

舟引の妻は唱奇の合歡の花 千那

白雪や鐘よりしるも日れ夕 史邦

素堂之蓮池邊

白るや蓮一扱の拾りてま 嵐蘭

目焼田や時くつゝ鳴く蛙 乙羽

日乃田者さ鹽の池に蟻くれ 元北

水を月も鼻つとあつて殺さる 同

日の曇やころねく果ると牛村台 正秀

予一々之使と昔の冠者よ名は其 本高

猿蓑集卷之三

妹

花月や蓮なちくくよ花一

此句東氏よりききし中

素堂の

かひらちのめけ初さ齒や秋の風

芭蕉序と何よおれや妹の風

人よ似て猿のまを細袂のそ

不知
讀人

杉風

路通

珠碩

加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯のきくやまのこ 曾良

芦原や踏鳥の寝ぬおを輝の風 山門

あまのやのや懺悔を留れ枯の心 凡兆

く川露や枯の外芝の起あらし 去来

大比叡やこゝぬおを草のやめさ 野童

と葉らりて跡とわれぬや和の露 凡兆

文月や六日もなみの夜よ似す 芭蕉

合歡のよれをさういふと空あけ 同

七のやあまのりううはうらぬへし 杜若

伊賀小年

こぞのいづれもくちり相撲取 去来

伊賀

朝のよと霧眼をちのけりし 風姿

膳所

雲のやあつこの曇れはくさす 及肩

笑のほほをよとほす権ふし 嵐蘭

よやあまのけしとるし木槿成 秋風

よやあまのけしとるし木槿成 千那

十七

十七

しらのねのぬめあるまねの嶽雨 史邦

そよよか藪のゆらゆらあし 皇業

枯月やよとの波のうらやま 子尹

暁のよの靉めころや 羽紅

ハ 暁のよの靉めころや 暁のよの靉めころや

まよひく楊乃先けのるら 允兆

まよひく楊乃先けのるら

思ふのよのぬめあるまねの嶽 去来

草のよのぬめあるまねの嶽 李由

え 草のよのぬめあるまねの嶽

え 草のよのぬめあるまねの嶽

いつくまはたれも秋のま 曾良

桐のよのぬめあるまねの嶽 色蕉

百舌鳥あくやのよのぬめあるまねの嶽 允兆

初層よのぬめあるまねの嶽 落梧

亡人

望田より

痛属此後さしはあつて海
色

海との舟を小海老よまの
回

加賀の小寺と云ふ又々田乃
神社の宝物と云ふ又々
うきうき草一乃と云ふ
錦のきれもさきと云ふ
うきうきのあつり懐かしく

ひんやし甲のふれきりくす
芭蕉

葉島や二葉中の世は
尚白

くさくさや響よまの夜は
風琴

世の心はさかしく

葉月や名鶴よ海の人
千人

とく月に菴のあつて
之道

葉絆と月をなすあり
半残

月えせん体見の
去来

公羽を草舎よ

伊賀

松もくろく松益
土方

加茂よ詣きては涙のこぼれ

あつきのやうにわかれは
あつきのやうにわかれ

月詠や拍手もろく膝めし 史邦

友近の六條はかきうらひ
さしききりりりり

伊賀

影やうたふらふら朝日後 卓袋

しやん美やあしうらひの歌 乙羽

京筑紫をゆく月うらむ中 丈州

明の相もやうな月一り 凡兆

婦りひてしよあつ月のぬ 高白

向の籠るやの月うらむ 曾良

え禄二年つらむは涙り

月をさくくし氣比の海舟は
つらむらふあつを

月詠一むらひのしよみ乃と 芭蕉

仲殊の望猶子を遠き

うらみの夜の月もつらむら 去来

月詠ややうき茶はあつ 昌房

膳所

月ノ下ニ坐ル人の影ノ長クシク
羽紅

僧正のいへよふ屋柱をぬかし
尚白

新瀬や鳴つのはの龜井
凡兆

一戸や衣もやうこさし人
去來

釋の袖はる迹——
越人

洪糟やわすしもの食子ノ流島
正秀

あやまちてきとう地ゆる鑪
嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音らりたりたつ——葉山守
凡兆

しつ——き拍子のんく——曾良
曾良

旅枕麻のつきを軒下
千里

鳩々や流杯の齋麦島
珠碩

とちや下さるや梅の火
凡兆

鑪釣ひのるし——
半残

わあ向のふゆゆりきり——
尚白

葉を切る跡ま——
其角

さよふに鶺鴒の鳴き声も
珠碩

このはらのやももも
土芳

稲うらゝ母よ出立ぬぐあは
凡兆

自題落柿舎

花ぬゝや枝もちらもあど
去来

志いほおかけしつゝ
塵生

肌さし竹切のすす
凡兆

神田みよ

まはらうらうらの
秋

神田の鼓うら
鼓足

あはれ
あはれ

さびしき大なる
嵐雪

しねの口五日弱
丈州

立ゆるねの夕や
凡兆

世の中、鶺鴒の
同

陸奥れ齒よ
荷公

三三三

三三三

猿蓑集卷之四

春

梅咲てく方想乃悔もあり

露路沾

上鴈の山莊よまうく

梅も春や山路隔入んかたやう

去来

しんん香やふ入累半の角

句空

庭真

梅も春や山利しも流す谷真

土芳

廿四

しら隙を穿ちてささる梅のよ
半残

梅の香や酒のこぼれあはれ
膳所 蟬鼠

しらんのおやけ一物を踏のぼり
其南

子良銀のほよ梅もよき

河子良子れ一とこ梅梅のよ
芭蕉

瘦女教や作りたす我の軒の梅
千非

灰捨て白梅くさむ垣新の
元兆

日當りし梅咲たりや眉半房
膳所 支那

暗香浮動月黄昏

入桐の梅よりりぬりさくれ
風麦

武はよほとむく旅亭の
残喜

夕霞くさし窓の桐月や園の梅
乙瓶

辛末のくさし生ものくさめ

ついでくさし梅のくさめ

のくさし梅のくさめ

梅のくさし梅のくさめ

よきしきまつて候きけしき
もつて人の心も忘れを忘るるや

夢さして一白くちまほしめ
 百へのひてはさくち園のひめ
 ひらら寝の能宿さくちひめ
 野田や尾越のくち摘み果
 くらやちまふ備まのち果
 ちまひめよあひひめちま
 如行

憶翁之客中

裾りて草をまつてちん草枕
 つとすくち踏ちかきちあち
 七種下跡よちち朝ちち
 家ちちち跡のちち根ちち
 ちすちちちちちちちち
 脈ちちちちちちちちち
 鈴ちちちちちちちちち
 鶯のちち踏ちちちちち

嵐雪
 路通
 其角
 文州
 其角
 同
 去来
 伊賀
 一桐

雪やしら座一みりれきりく
江戸 溪石

うらり午やを泳めりれくし
其角

鶯や下駄の齒よつく小田代上
几兆

雪や窓よ久ちをよすんあく
伊賀 魚日

やぬの雪を柳うらりすく
探丸

けし溜はきりめ持へき柳
江戸 卜宅

詠くくくへてくれし柳
同 遠水

川極変えれよ柳
尚白

青柳の志しれや鯉の住所
伊賀 一啖

雪をけや蛤いす場乃
同 木白

待中乃正月もくやら月
揚水

回や歌よ在て

妻やしらやの雪の妻
色焦

うらりやうらり切時猫の意
越人

うきよなよけりけり
去来

雨路泣きく餘寒の當座

其のまはらふもさしめ羽成の 龜公羽

おのまはらふもさしめ白の 尚白

出らりや極よちまはらふもさしめ 龜公羽

とまはらふもさしめ物あはれ 嵐雪

骨紫のまはらふもさしめ青くれ 凡兆

白奥や海言ハ下敷のふ合を 其角

くのもさしめさしめは極海言 松峯

まはらふもさしめさしめは極海言 元志

陽炎や取つてさしめは極海言上 荷分

わけは極海言やまはらふもさしめ 百歳

うけりよちまはらふもさしめ岸のあ 土方

は極海言のまはらふもさしめ 氷同

野らふもさしめさしめす極海言 凡兆

ふけは極海言や柴胡の糸のまはらふも 色蕉

いとゆめは魚川のまはらふもさしめ 配力

物容の塵よちまはらふもさしめ 嵐雪

彼岸の人とむすも一夜二おの 路通

まのしやや帝れありとく涅槃像 野水

花並ぬ裏ハ燕乃かうい道 九兆

まごうく今や紀のへいあ房 伊賀 沢雄

春ぬや年々のふ草小花はあぬ 嵐虎

ふるふよあて

まをやうり出るるまは門 猿雄

不惟と金めさ起るれあぬ 色蕉

春ぬや田養のふれ銀責 史邦

しるゝあのみや軒まは花 羽紀

泥垂や苗地水の眩つらん 史邦

蜻こころる本舞の竹や虫の糞 昌房

振翁や下座まやまをま年世離 去来

まのしやいすれ離の写巻のふ 伊賀 萩子

桃柳くらりありとやまんあれ子 三河 羽紅

まのしやま境まのぬらまのふ 鳥巢

ちん上

先九

里人の暗居しむる田畑られ 嵐推

蝶のまじりて一夜を寝よらり若菜の 半残

糸を切て白根の森をの森に 桃妖

川のほとりこころすしや療 園風

日の影やこころにれよの靉すめ 珠碩

花の露ぬむ妻のすまや楳の先 土芳

南の他や果なまらうてあけ衝 芭蕉

越より飛浮く如くして露の
つらみのちやまきまきまきく道

あつらひし
まきまき

鴛鴦の樟の枯梅よ月ひぬ 允兆

うさぎのうらみんたるやめし 石に

子や結ん餘りきまなのきあり 杉風

しぐらあく中れ拍子や維多あり 芭蕉

色紙巻のふしを
讀

蓬草小鋸流しあやられ 曲水

木尻筋旅しとるく物なあり 山店

畫讚

山吹や夕日の焙炉は白く時

芭蕉

白玉は雪のまじりて梅の如

車来

わらわらしくもさかすか
ありてはの髪けりてんめ
しらしくとけりて

竹のうしろを昔ながら梅

羽紅

鶯半打よよとてさきさき

津國小本

坂上氏

うしろのさきさき梅の

芭蕉

しらしくもさかすか

利男

東叡山よあうぬ

小坊まやまのあうぬ

其角

一枝のゆめはさう

尚白

雞の卵はさきさき

凡兆

まきさきさき梅

丈艸

馬肉のさきさき

史邦

中斎よさきさき

千那

葛城のふもとをさす

ねえさーあまのり神の顔

芭蕉

いりの園花垣のなはらのついで
南に乃ハ定極代神ノ附
らまきとると云傳へんらん色
地し

一里ハこれ花卒のふ縁や

同

三又の墓東武各中にも
三歳して死れ九年の及みの
城よりしらぬ墓のふは極極重
けりしりかみく母共おこり
つててうれ極をたつは後をよ
他の墓程とらう笑もれはまき

まうやの吸よ野の往還

園風

知人よあまのり

去来

あまの僧の嬉り

凡兆

浪人のや

嵐を尋の夜あれう

半残

睨きしれ

長眉

これの奥もよ
このはほく

大寺やうれ奥乃あのみ

曾良

道灌山よのほし

る澄やまをよのびをひらけ

嵐蘭

ほしの強きんこ

探子に夜らるふれまし

羽紅

庚午の歳家をくつと

加筋

綾よりりちまゝの花はらりし

北枝

しりらちやか藍の櫃や

江戸

凡兆

酒棠れしと満より夜の月

普船

大和の脚乃いし

草臥くちやるはやぬのよ

芭蕉

しるや躑躅ふけの尾のひ

探丸

やうくし海よらんや夕日歌

智月

鬼角しておまつおし

伊賀

山川

鷗鳥のやううらやうり

式之

木曾塚

其よの石のなほはな

乙羽

春風夜をよめる御殿の堂花 曾良

望湖水惜春

ゆきよとよのけのしやとさき 芭蕉

かきし一花はくちんちん 芭蕉

一花を舞臨みてさるる 芭蕉

あはれみよきさうすたけ 芭蕉

あはれみよきさうすたけ 芭蕉

猿蓑集卷之五

去来

カインツロ
カウの羽を刷ぬまろし

一ぬきし月花よの葉志のまろし 芭蕉

股引の朝のあざし 九兆

たぬきしよきしすの條張のさ 史邦

まよしよきし遠くかきし月 蕉

くよとれすよ物乃梨 来

あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく

邦 兆 来 蕉 邦 兆 蕉 来 邦 兆 蕉 来 邦

この春を盧同の男がゆきゆき
さよふしむく月の夜
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく
あつむくろ墨狩やうと娘をく

邦 兆 来 蕉 邦 兆 蕉 来 邦 兆 蕉 来 邦

獲骨代すこ起る力なき
 隣をうりて車引こじ
 うきくを積設垣より
 いすや別の力より出す
 せうけふ帯てしらすら
 ゆきい切くる花より
 青天よ有明月の影なりけ
 湖水の秋乃比良たらしむ

邦 兆 蕉 来 邦 兆 来 蕉 来 邦 兆 蕉 来 邦

紫のやや蒼妻のすまはれ歌をよ
 めのこ若智ぬ月影のうき
 押合てる寝くは又きつらわ
 しまられや乃まるの赤き
 一掃歎つくる念のしれ
 枇杷の古名はよき

邦 兆 蕉 来 邦 兆 来 蕉 来 邦

去来九

芭蕉 九

允兆 九

史邦 九

九兆

市中ハ物のよほら也及此月

あけくくくく乃新 芭蕉

二番草取の果と種よせ 去来

原くくくくくあ一投 兆

け助ハ銀のん志くす不自由と 蕉

たさきくくく長と短指 来

三

四

草村は蛙こはくろくまうくま
 落乃其まらちにはけいけいす
 道心のむらりあまれつるむじ時
 能やれ七尾の冬は行うま
 魚の骨志りある道の老をそ
 待人入へ小舟心の鑑
 立りり屋風を倒す女子
 湯後六竹の葉子伝し

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来

荷香はまをそ吹流すの嵐
 傍やとしく寺りく人
 さるこの様をそけり様
 各 年は一斗の地子しるや
 五六斗しよまつりの家儲三つあき
 是依り少くも黒けりある
 追つて早よ流る乃刀持
 りらりそ何し水にほり

来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来

五七
 三

戸障子もひらきしの賣敷 蕉

うんとおもしろいところ 来

ころころ草鞋を踏む月夜 北

蚤ふさふさよ起し 西秋 蕉

うのまのころころあつる林蔭 来

ゆらゆら蓋のあじむ草履 北

草庵の暫く枯るてやちり 蕉

いのち嬉しき懐集れき 来

ささやくかきうらむる庭を 北

ほおの果も皆小町ちり 蕉

あにあり粥すもよも後々 来

ゆらゆらとやうき屋敷に板敷 北

ふれりく風遠くすまのり 蕉

あつちとぬき合のぬきさ 来

凡兆 十二

芭蕉 十二

去来 十二

凡兆

灰汁桶のきやとろりもとり
あゆみのすりゆくも自夜下る秋 芭蕉

新玉おあかりたる月つけよ
あへて嬉し十のころも 去来

手代経へは物を極く子ゆへ
きりぎりすにたりしを海に 凡兆

さら下

そ

ウ
糸出して眩は餘る丸りの物
摩耶のうろねはまはれし種
ゆまのうろねと喰ハハ風薫
軽のうろねをうろねと喰ハハ風薫
そのまのうろねをうろねと喰ハハ風薫
運口くまのうろねをうろねと喰ハハ風薫
金鏝とくまのうろねをうろねと喰ハハ風薫
あつ風とくまのうろねをうろねと喰ハハ風薫

来 水 兆 蕉 来 水 兆 蕉 来 水 兆 蕉

町の秋の文は海や
何のまのうろねをうろねと喰ハハ風薫
名
よるのうろねをうろねと喰ハハ風薫
榮ふ家のむらさき
あつ風とくまのうろねをうろねと喰ハハ風薫
旅の地をに有明

来 水 兆 蕉 来 水 兆 蕉

丁をばし女はあまのこゝろ
何れもくまの娘乃ちあま
夕月夜更の音ははたけの
人もあまのこゝろあま
うそつに自慢いそぐおほ
又もくまの娘をさし出す
堤より田の音やさしてはた
かき成りやうの娘を社あり
蕉 兆 来 水 兆 蕉 水 来

拍より片尻の音さくあまのこ
雨のやうに女はあまのこ
層林より音はたけの
志はく水は音はたけの
糸繰はたけの音はたけの
末のこ三月曙はたけの
水 来 兆 蕉 水 来

凡兆 九

芭蕉 九

野水 九

去来 九

餞乙羽東武行

芭蕉

梅の葉まわりをけりてけりけりけりけり

かきあしりてきりけりけりけり

五云存ありてわ田よ土持はるれや

志しき程よてりよれよる条

乃隅よ虫歯くくくくくくくくくく

二階の窓よれりりりりりりりりりり

乙羽

珍碩

素男

乃羽

芭蕉

ナラフ

放やううつれ踏んぐるも
編のふた乃力ちきうせ
わつしんれおまけの鏡舞
心懸願しと叫ぶらふれ
卯の別乃箕良に並ぬや
すまきるねの志のあらり
萩のれすしきのれよまて
きたうしうる百舌るよ二整
男 碩 品 碩 蕉 碩 男 智月

懐よまをばあしむねの月 凡兆
けさうまうぬあのはつら 品
鏡の柄よますうらゆるふれ 去来
灰まきこらうすおりの跡 兆
喜れ目よはま輝てくる孫机 正秀
店屋あうよ統のまうり 来
汗ぬらふ酒の志の糸 半殘
まされまうしと雛乃下 土芳

大膽よみまじりて
 身われぬ汝の取所
 小刀乃拾刃下る細工
 桐よ火とりす大年の夜
 うそよとねよ後も後
 しのみ合せよ
 此よものれめを
 碧油糸をせよ

残 芳
 園風
 猿 籠
 残 風
 籠 風
 籠 風

咳の隣から
 海へいよ
 船やうを
 うすを
 花よ又
 雛の被を

揚つ
 人な
 金
 史
 野
 紅

芳
 風
 籠
 籠
 籠
 籠

芭蕉 三

乙羽 五 土芳 三

珠碩 三 園風 三

素男 三 猿雖 二

智月 一 嵐蘭 一

允兆 二 史邦 一

去来 二 野水 一

正秀 一 羽紅 一

半残 四

猿蓑集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥名向のうららよ山を
園分山と云うれを園分寺の名を
傳ふたすへ一林扉は細く流を流
るる翠微よ冬を中三曲二百歩
に八幡宮多むたすふ神傳
ハ祿陀乃る像もや唯一の家よ

甚く思ゆる事とを两部光成和の
 利益益乃塵を同一と志たしむる
 又貴一日比と人の諸さりたれハ
 いとく神さし物志くある傍と位
 捨一草の戸をよるとき根を軒
 をとるとる部のみより聖なる物揮
 婦一とをゆるり幻位養と云ある
 の借ありハ勇士菅沼氏曲水子と

伯父よあん侍りてを今ハ八年
 ちくはと成りてよ幻住と人の名を
 のと強りたり又市仲城と云事
 十三年計ありてみ十三年下ちり
 身と養中の子のを先人の端中
 家と離て真羽と歌沼の皇と目
 下り面をさしとてまことあり
 らくしき北海の荒磯よとて

破りてと歳湖水の波は深徳の
浮葉の流とくましくさるれ一本
乃陰のふもしく軒端羨あふぬ
免垣の徳はあしくお月れ
初こころりあつた入一ふのちうと出
一とくちかたしうさあさくはる春
のうらぶらさあさくはくつ一咲あり
ふあまのあまの河ささくはくはく

行宿りしあは後さくはくはくはく
のうらぶらさあさくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはく
南よしくと身ハ瀟湘河をよさる
しきと末申よさくはくはくはくはく
あはくはくはくはくはくはくはくはく
北風海を渡しく涼一日枝の山は良
れさくはくはくはくはくはくはくはく
馬橋もあはくはくはくはくはくはくはく

782
783

本樵のひり舞のふ田よ早苗とる
奇雲をたふす雲のたをよ水鶏は
お音羨景地くくくめくくく
れく申よの三よ山よいせ客よれ侍よ
ゆきして武をたゆ古よ拙もひり
い〜〜田よ山よ古人よきくぬきや
く山嶽千丈よ客袴腰こく山よ黒
津の里い〜〜後くありて洞代も

よく〜〜く〜〜ん美客集の寫あり
きりね眺るま〜〜あり〜〜おとほ乃
客よ遠のほり松の棚作葉の因を
よぬ〜〜格の懸掛とく名付彼海棠
よ葉を〜〜〜主簿客よ〜〜葉を
結く王公羽徐徐待よあ〜〜唯睡
群山民と〜〜辱顔よ是を〜〜け
ゆ〜〜空山よ風を正折て〜〜塵ス〜〜

廿七
廿八

く心も先ある可き谷の清水を
汲み自ら飲みゆくのも成備と
一坪の宿いしるふも昔傳さんか
ゆよんくく伝あしつてもく人を
る物しるさむし持佛一間を隔て夜
の物みんじくしるふなまらうもくし
つりさばを筑紫さるまよの傳る
かきやの甲斐にうく巖子うくはら

洛よのほりいしるうりあしあし
しる額をとくしるしるしる
海く幻住菴のこと字を繕くはれ
草菴の記念さるぬしうくしる
いし旅の宿とさるし器とさるし
さるし木がれ捨を越の愛善し
枕のとれ宿よあしり昼の婦し
あしあしあしあしあしあしあし

里のねのこた入しきりていのち乃稻
くさあー鬼のこゑ細よりよあや
あやうぬ農談月殿よ山の端よ
うもろき夜に燈籠よ月を結して
歌を付らねと取らん因雨よ是歌
をささすいこいこいこいぬよ
深寂を好く山野よ跡をかくて舞
こゝろあやう病め人よ傳てを

まいしり人よ似たり借年月れ
梅く拙き身れ程をよのよ
あゝ何ぞは官舎命れ地まう
やまーい佛の離祖室の扉よ入
ら舞しきりあやうりたす月を
よあよせめ花鳥よ情を芳し
暫く生涯のこゝろ事とせ入あや
孫よ子孫をさうしげ一筋よつみ

くも樂天ハ五嶺ニ神をたづなり老松ハ
ニ瘦より賢愚文質のこころ
よころいつまう幻の拙をこころや
みまのいけくぬぬ

とんどのし推れあのまらるる

題芭蕉翁國分山

幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢
也何處無山川風景因人
義也間讀芭蕉翁幻住菴
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉迺作鄙章
一篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺

古松鬱兮綠陰清

茅屋竹椽總數間

內有佳人獨養生

滿口錦繡輝山川

風景依稀入誹城

此地自古富勝覽

今日因君尚益榮

元祿庚午仲秋日 震軒具拜

儿右日記

時を脊中へんやる林扉の曲水

と川を流れて跡をたづねる野水

鶏ももろく鳴る去来

海を五月雨うぬる凡北

軒らうも名梨やうの千那

細脰やうもやうの珠碩

贈紙帳

おもゆるや 砥地よりけと 縁あり 野徑

いづこまで 露の露より 里東

雲を飛ぶよ 乙羽

顔や 薄乃中 怒誰

白や 探志

五羽六羽 卷らるる 元志

まつり 泥土

笠あふり 櫃す 史邦

月結や 海を 尻尾より 正永乃

志つらさ 柳陰

涼 如行

訪よ 留らあり

稚のよ 林水

目下や 市隠

文よ

振所まや 早苗の 半残

麦乃粒を吐き出す

一袋にこれや鳥お田のこころ 麦 之道

書音

一隻入るうさくらや燕のうさ 長崎 魯町

夕立や梅木の鼻に一さきり 及肩

昇袿揺掛

梅ゆや田と山はくさきり 尚白

贈蓑

志しふぬのまこあきみのし 北枝

木履わく侍ふりきり 永節

包紙の書

錦よさす茶袋や秋の露 膳所 扇

稻のふくれを佛はま 智月

石ふやけり果下り 羽紅

桶の輪やうねをむ 昌房

里ハハク 何処

啼やいほ境よけりあふも

越人

越人といふは訪合

筆の交れ倍よ飛入菴のれ 等哉

明年弥生尋旧菴

君のふやふしよ星より下れはつ 嵐蘭

同其

為しきり居をよへ住けり 曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也

非比^{スレニ}彼山寺偷^ス衣朝市頂冠笑

只任^{スレニ}心感物写興而已矣洛下

逸人凡兆去來隨翁遊學棋館

竹窓躡^ス等凌節斯有歲屬撰此

集玩弄無已自謂絶^ス超狐腋白

裘者也於是四方喙友撞之徃

來或千里寄書々中皆有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集錄者索居竄栖為難
通信且有旒倪婦人不琢磨者
廉言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也
維眈元祿四稔卒未仲夏余掛

錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席
見需記此支題昏尾卒援毫不
揣拙庶幾一藁高張有補于詞
海漢人云

風狂野衲

丈艸漢書

正竹書之

京寺町二条上ノ
井筒屋庄甚衛板

